

しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会／浜風会会報 No.25

浜風会/入会募集中
毎月第1,3木曜日

八阪神社のお天王様

今年も七月六日(日)に建速須佐之男命を祀る八阪神社で、お天王様がが行われる。

八阪神社の由緒(神社名鑑の記事より)

当神社は、元は牛頭天王社と称し、東海道舞澤駅(現在の舞阪町)の西北数町浜名湖に接臨した高台に鎮座し、従古より神霊の著しい神社と崇敬奉祀されていた。

明心七年(一四九八)の大地震によって発生した津波により水没の憂き目にあったが、平素より怠慢なく奉仕していた社司牛守藤太夫外数名が高波逆波の中を命懸けで大神のご神体を捧持し、辛くも流木に掴まって現在地に漂流したことから当地に社殿を新営した。

悪疫撲滅、五穀豊穡を祈願すれば靈驗ありと称えられ、社地は將軍家代々、御代官所より永代除地の当村御免状を下付されていた。明治二年、神仏混淆禁止の布告により、牛頭天王社の社名を八阪神社と改称し現在に至っている。

疫病撲滅の神として頼られてきた

八阪神社の境内に浜松市大工町から寄付された鳥居や灯籠が見られる。それは「寛政元年(一七八九)、大工町に悪疫伝播し全町あげて本神社に祈願し、悪疫撲滅

したる・同二年初夏本社雨覆一棟石灯籠一對の寄付あり」の古文書や大正九年(一九二〇)に建てられた鳥居に見ることが出来る。

情報の乏しい当時において、流行り病をいっそう恐怖に感じ、地元だけでなく広い地域の人達に頼りにされていた様子を偲ばせる。

海外との交流が盛んな現在において、思わぬ感染症が突然流行ってくるかも知れない。こうした流行り病に、現在にあっても油断してはならない。日頃より気をつけていきたいものだ。



茅の輪くぐり

例祭日には茅輪神事や豊栄舞

鈴木達範宮司は氏子の協力をいただきながら、いっそう賑やかな縁日になるようにと、新しい試みをしている。

茅輪神事は「茅の輪くぐり」とも言われ、平成二十五年から行われている。

茅とは茅菅・菅・薄などの総称で、この輪をくぐり越えて罪やけがれを取り除き、心身が清らかになるようお祈りする。

須佐之男命が旅の途中、蘇民将来に厚いもてなしを受けたお返しに、後に「もし悪い病気が流行することがあったら、茅の輪を作った腰につけていけば、病気にかからないでしょう」とお教えになった故事に基づき、「蘇民将来」と唱えながら茅の輪くぐりが行われるようになったと言われている。

豊栄舞は、平成二十二年から、仲村、札木、出口そして田畑の氏子から小学校四年〜六年の代表各二名、合計八名の子女により、五穀豊穡と家の繁栄を願って奉納されると同時に、参拝者に見せている。境内に花が咲いたような優雅な舞である。

その他ふれあい市、撒饅餅の授与、氏子の福引券の抽選会等行われている。

一家の無病を祈りながら、夏の縁日の楽しさを味わってみてください。(鈴木照義)

江間家の 尺時計の表示板

江間泰弘氏（坪井町）所蔵の尺時計の時刻表示板が二枚ある。浜松市博物館のご教示により時刻を示すものであることがわかった。それは江戸時代の時刻は現在と異なり、昼夜の長さに応じて配分する不定時法によるものであった。

尺時計の本体そのものは江間家に存在していないが、細長い四角の箱と上部に機械装置があり、柱に取り付けるものである。箱には時刻を示す目盛表示板が取り付けられ、機械部から錘が一定の速さで下っていき、錘の位置から時刻を読み取るものである。

江戸時代後期になると一般にも使用されだしているが、目盛表示板は季節により取替える必要があった。季節により昼夜の長さが変化してくるので各節気に対応して取替えをした。

日没後の薄明が終わる頃（暮れ六ツ）、錘は最上位の酉の位置にあり、戌、亥を経て子の位置（真夜中二九ツ）にくる。更に丑、寅を経て薄明が始まる頃は卯の刻（明け六ツ）となる。

昼間は太陽の位置から概略の時刻が分かるので、使用の度合は減っていたものと思われる。時刻を示す十二支間の間隔は夏至の頃は夜は非常に短く、昼は長い。冬至の頃はその逆となる。

二枚の表示板の中で、一つは片面だけで十一

月中（旧暦で冬至）とある。他は五六月節（旧暦で小暑、立秋）を示し、裏面には五月中（旧暦で夏至）の目盛がある。板の表裏を利用すれば板の数は少なくすむ。保存された二枚は偶然なのか、使用の頻度によるものか興味もたれる。四つの節気の目盛から、昼夜の長さの變化がおよそ読み取れる。

この目盛表示板は漆の黒塗りで金泥で描かれ縦二十二cm、横二・七cmの小さな板である。丁寧に保存され貴重なものである。江間家でどうして時計を所持するようになったのだろうか。

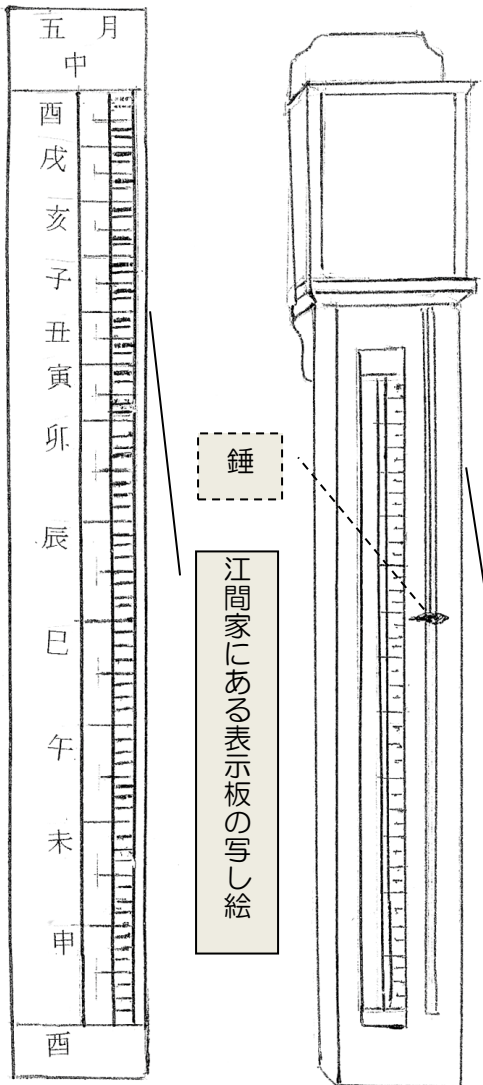
江間家は江戸時代後期の坪井村の年貢関係の書類の中に、名主徳右衛門としてしばしば登場している。村の組頭や百姓代とともに任を負

いながら、舞坂宿加宿の村としても馬郡村といっしょに宿の運営の業務にあたってきた。

当番日には舞坂宿に出掛け、問屋場で通行者に必要な人馬継ぎ立ての業務等にあたっていた。早朝からの勤務のため、時刻の把握に時計は必需品であったであろうと想像してみた。

なお、時刻表示板はこの地域特有のものではないと思われる。東海道の江戸〜京都間では江戸が最北で、篠原〜舞坂間が最南に位置するが、緯度差は一度程度である。それ故、北緯三十五度線をほぼ東西に行き交う東海道路筋では、十分に使用できたものと考えられる。

（鈴木義雄）



尺時計本体模式図（現物は江間家にはないが、浜松博物館発行資料より）

子供達に地域のことを

篠原小学校から、「地域の歴史のことに関して子供達に案内して欲しい」というお話をいただいて以来、浜風会としてその要望にいくらかでも応えていくことと、毎年取組んでいます。その関係する経過について紹介してみます。

浜風会の目的

浜風会は、昭和六十二年「篠原会」家庭教育を考える会で取り上げた、「ふるさと掘り起し運動」に端を発している。

子供達に地域のことを教えていくことも目標の一つとしているので、当然の務めである。

小学校「郷土資料室」設置

「郷土資料室」は平成三年、「ミニふるさと創生事業」で篠原小学校の空き教室を借用し、地域の皆さんから提供いただいた貴重な資料を展示する。当時「ふるさと資料室」として開設した。「あゆみ」「せいかつ」「しごと」と「まなび」に分けて展示開始した。

その後平成二十二年耐震工事のため、補強壁の設置を機会に展示内容をリニューアルして以来、



小学校にある郷土資料室展示風景

より見易く且つ毎年内容を更新し、馴染みのあるものになっている。「郷土資料室」は誰でも、いつでも見学出来るので、職員室で鍵を借り、一度覗いてみて下さい。大人の人でも、実際住んでいる篠原について、いろいろ新しい発見がある筈である。(写真参照)

地域探検クラブ

小学校四年生以上を対象に「地域探検クラブ」がある。だいたいの午後の二時半ごろより一時間を使い、探検出来る範囲で歩いて案内して回る。昨年度は五回、上記の「郷土資料室」を皮切

り、立場跡、一里塚跡、高札場跡など、昔の東海道に関係する史蹟や美人塚、亀の供養塔など言い伝えやお宮、お寺など案内した。多くは旧

跡なので彼らの実感は今一つであるが、案内に心掛けていることは、現状がどうしてこうな

っているのかについても、わかってもらおうということだ。この地域を知るきっかけになってくれたら嬉しい。

総合学習で地域のことを

二十五年生の小学校三年生の総合学習の中で、「篠原の自慢を見つけよう」が取り上げられ、その参考のため、篠原地域のことを説明する機会があった。ここでも「郷土資料室」で、予備知識を得た上で、それぞれグループを作って気になる所を見学したようである。そして後日グループで篠原の自慢を、まとめ上げ発表し合った。

誰でも住んでいるところが好きになりたいと思う。そのためには住んでいるところを正しく知り、そこに愛着を持てるようになる。そうならば篠原のことが人に話せるようになり、篠原の自慢がきくと見つけられるだろう。

(山下勝彦)

平成26年度主な活動

- ★ 山下孝先生講座
- ①「もう一つの伊勢」
- ②「蘇民将来の広がり」
- ★ 本年のテーマ
- ・現在の変化も把握し表す
- ★ 主な自由研究
- ・尺時計の表示板より
- ・八阪神社、お天王様
- ・篠原の偉人を知ろう
- ・南部土地改良区の記録
- ・伊能忠敬の遠州路測量から
- ・メガソーラー立ち上がる
- ・篠原に鈴木姓何故多いか
- ・篠原の祭りの変遷 等
- ★ バス旅行／小旅行
- ・6月19日：
- 伊勢参りともう一つの伊勢

歴史メモ16

前浜海岸で思うこと

前浜海岸と言えば浜風、浜砂等がすぐに思い出されます。その中で特に懐かしく思い出されることをあげてみます。

浜野球のこと

私の小、中学生の時には馬郡部落の諸先輩達との春、秋の休日に野球をしたことです。

前浜の網小屋や舟小屋の南側海岸との約100m以上あったと思いますが、あっとい間に砂浜が野球場になりました。足で浜砂に線を引いて素晴らしい馬郡球場の出来上がりです。選手約20名によるものです。時間の経つのも忘れ太陽が西に沈むまで、暗くなるまで野球ができ

ました。因みにクラブやバット等道具はみなを持ち寄りでした。

地引網のこと

また前浜での地引網では、入った魚を逃げないように「網で魚を巻け」と言われ、舟より飛び込んで魚に網を巻き付けて舟にあげたことを今では良い思い出です。その際に海中で目を合わせた魚のことを今でも思い出します。あの時の魚はどうなったのか？

伊勢湾台風のこと

伊勢湾台風は屋間の台風でした。先輩と台風を前浜に行こうと、皆で見に行きました。怖いもの知らずでした。しかし台風で波が堤に

あがってきたので、皆で逃げて帰りました。今思うと、よく助かったと思いました。

今後の願い

網小屋、舟小屋の有った堤のあたりは、現在浜名バイパスになっており、車が連日ひっきりなし走っています。何ということでしょう。昔の人達に、出来ることなら見せてやりたいものです。

現在は津波対策でバイパスと遠州灘との間に新しい防潮堤を作る計画が進行している今日この頃です。また松林は松くい虫に荒らされてみじめな状態になっております。これからどのようになっていくか心配です。

今後共住民の安心、安全が守られますことを祈っています。

(刑部傳志)

アンバリ(網針)

あん針という物が、小学校の郷土資料室に、寄贈され保管されているので、調べてみた。

あみすきばり
網結針、アミバリ、アバリともいい、網を編んだり、修繕したりする際に使う。形状は、船形をして扁平。先端近くに透かしがあり、後縁部にはへこみがあり、互いに糸を掛けるように工夫されている。この形は世界的にみても同型の物が広まっている。材質は竹または木が多かったが、近年はプラスチック製が殆どである。

宮城県の里浜貝塚から、土器や貝、魚や獣の骨、漁撈具、装飾品などが多数発掘されている。その中に、鹿角製の網針(全長10.7cm)が出土して注目を集めた。しかも形状が、今日一般に使われている網針とほぼ同型であることは驚きであった。福井県の鳥浜遺跡からは網類の遺物が、愛媛県の舟ヶ谷遺跡からは、結節をもつ漁網が出土している。これらのことから、縄文晩期(3,000~2,300年前)には、網針を使用して網が編まれ、網漁が行われていたことが実証された。



宮城県里浜貝塚出土の網針

長崎県の吉岐郷土博物館には、樫材で作られた全長114.5cm、幅12.5cmの大きな網針が所蔵されている。解説には「目とり針(鯨あみ用)とあり、鯨取り用の網をあむ目おこし針で、約300年前から明治の頃まで使っていた」と記されている。(鈴木幹久)

浜風会会報第25号
篠原協働センター同好会「浜風会」
(篠原地区郷土の歴史を学ぶ会)
編集委員 委員長 山下勝彦
鈴木義雄 鈴木幹久 鈴木忠
中山清
発行責任者 山下勝彦
発行平成26年7月1日
連絡先：浜松市篠原協働センター